

み うら くに お  
三 浦 邦 夫

学位の種類 博士(文学)  
学位記番号 文第115号  
学位授与年月日 平成8年3月7日  
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 仮名草子についての研究

論文審査委員 (主査)

教授 鈴木 則 郎      教授 佐々木 昭 夫  
教授 加 藤 正 信  
教授 仁 平 道 明

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 序

仮名草子は慶長から天和の初めまでの約80年間に著された仮名書きの通俗平易な娯楽的読み物の総称だが、その成立は、近世という新時代をいかに生きるかの人々の関心に根差し、作者は自らのこの関心を表現する方法を手探りし、また人々のこの関心に応えて読む意欲を喚起する方法を模索して、先行作品に叙述形式を求め、その叙述を典拠として表現を形成したことに基づく。本論文の目的は仮名草子の個々の作品を取り上げて、その形成の在り方と性格を、作者の書く意図、もしくは意識と深く関わってその形成を規定している作品の典拠を明らかにし、その典拠がいかなる意図の下に用いられているのかの考察に基づいて究明することにある。併せて、以後の浮世草子への仮名草子の受容の様相を北条団水作『本朝智恵鑑』と都の錦作『当世智恵鑑』に考察する。

### 第一篇 仮名草子の形成とその性格

#### 第一章 随筆作品の形成とその性格

第一節「板本『目覚し草』の典拠の問題」は板本成立に関わる典拠の扱い方を究明する。板本の原本的作品に刈谷市立図書館村上文庫蔵写本『無名冊子』と神宮文庫蔵写本『目さまし草』があり、『無名冊子』→写本『目さまし草』→板本と成立し、その叙述は板本成立まで改変され続ける。板

本上巻の『宝物集』典拠と見做される叙述は、3本の対照から、『無名冊子』の叙述を改変して筆写した写本を踏襲したことが判明するが、写本と板本の当該叙述の対照から、板本には写本の書写の部分と写本に無い部分とがあり、この無い部分には『宝物集』に直接依った叙述があり、これは板本の筆者が写本を忠実に写す意のなかった証しである。この姿勢は『沙石集』典拠の叙述にも指摘して、板本の『沙石集』典拠の叙述にも無い『沙石集』直接依拠の叙述があり、新たに『梅尾明恵上人遺訓』依拠の叙述も加える。さて、三本間の典拠の関係を論ずる時、『方丈記』『徒然草』との関係は無視できない。『方丈記』依拠の『無名冊子』と写本の叙述は板本では『徒然草』依拠に代わるが、その顕著な例はその構成に直接関係している冒頭に見られる。首尾を欠き構成の不明な『無名冊子』の後半の叙述から推測して、元武士の隠者の庵を訪れた数人と庵主が秋の夜長に過去現在の世を語り、その後庵主が感慨を述べて結ぶ構成であつたらしい。この構成を、写本は春雨の夜に草庵主と友との対話、武士の隠者は単に隠者へという改変をし、写本の構成を踏襲した板本は『宝物集』『沙石集』『梅尾明恵上人遺訓』典拠の叙述を加え、『徒然草』に依って草庵主の感慨を増幅し、草庵主の跋を加えて再構成をしたのである。

第二節『『可笑記』の形成の様相』は『可笑記』典拠に中世の『沙石集』『十訓抄』、近世初頭の『無名冊子』『清水物語』があることを実証し、その使用意図を考察する。

1『『可笑記』と中世文芸』は『可笑記』執筆に際して『沙石集』『十訓抄』に依拠した作者の意識を明らかにする。『甲陽軍艦』に説く男道を自己の生の拠り所とする作者は『可笑記』に徳川体制からあふれたすりきり牢人の悲惨さを自身の牢人体験に基づいて語り、「当代」の為政者の不明と侍の華美需弱を批判し、主君と侍のあるべき姿を繰返し論ずるが、この批判の視座は『沙石集』中の「近代」の仏道批判の論理に共鳴し、それに儒教論理を滑り込ませて得たものである。また、『沙石集』『十訓抄』の説話を「当代」の見聞談に改変し、世と人のあるべき道を寓意的に教訓する方法を採った。

2『『可笑記』と『無名冊子』』と3『『可笑記』と『清水物語』』は、『無名冊子』『清水物語』典拠の『可笑記』諸段に現れている作者の書く意識を論ずる。『可笑記』に反男道の侍の現状を慨嘆する作者が『無名冊子』から採った叙述が武士や奉公人の憂うべき現状の叙述なのは当然であった。その彼が『清水物語』から摘記したのは牢人の悲惨の様や国主・侍の現状批判の叙述であるのはまた当然であった。だが、『清水物語』の批判が儒教に立脚したものであるとすれば、如儡子のそれは牢人体験から割り出されたもので、この異質性が如儡子の『清水物語』への共感と批判を生みだす因となっている。

第三節『『悔草』の創意』は全段の大部分を「…して後悔」と結ぶ作者の書く意識を解明する。作者は執筆にあたって多くの典拠を用いたが、なかでも『可笑記』を強く意識し、『徒然草』依拠の話の下に『可笑記』の話を書き寄せ、あるいは冒頭の叙述は『可笑記』に依り、以後は『野槿』に依るなど、『可笑記』を他の典拠の下に封じ込める。これを作者の書く意識に即して言えば、『可笑記』に依拠しつつ、それを隠蔽化することで『可笑記』と距離を置こうとする意識であり、『悔草』の題で書いた意識に繋がっており、その意識は「侍道はわれしらず」の表現に露出している。この表現は読者に作者は武士ではない人物との心象を形成させるが、作者は豊臣家旗本で後に徳川家に仕えた人物との考証があり、作者は「侍道はわれしらず」と言えない身であった。この表現と男道の学問芸能に励むべきことを説く『可笑記』とを作者の意識裡に並置すれば、「人は隼落時やあら

ん、其たつきともならは…萬の目利算勘など、其外あらん。武藝はしらす。かやうの物一道ならひえて。持やうにこそあらまほし」(中・22段)と俗世の生の手段を説き、「武藝はしらす」の一句を挿入して、『可笑記』が説く男道を反転させた作者の意識が浮かび上がる。『悔草』の書き手は「愚なる我ら」と自身を言う。作者は武士ではない愚蒙な書き手を創出し、その彼があるべき道を行ひ得ない「後悔」を述べるという方法を採用した。『悔草』の典拠には「後悔」の語が多く、この語の使用は常に規範の教訓者として読者の前に立つ。だが『悔草』の書き手は愚蒙ゆえに常に規範を犯して「後悔」の臍を嘔み、読者の共感をよぶ。作者の創意は典拠の「後悔」を反転した点に見ることができる。

第四節は山岡元隣の二隨筆の作品形成の在り方と創作意識を究明する。

1 「『他我身の上』論」は、『枕草子』『徒然草』に倣った叙述で綴られたこの隨筆の、内容面での莊子思想の受容を『莊子口義』依拠の事実に基づいて究明する。元隣は『野槌』も典拠に用いたが、『野槌』の羅山の論評に首肯的ではなかった。『徒然草』の「君子に仁義あり」の段を羅山は老莊に依る兼好を批判し儒教の仁義を説いたが、これを取り上げた元隣は「莊子の新註に此の書の字義は、あへて論語孟子の字心をもち見るべからず」と反駁した。これは林希逸『莊子口義』の「豈輔仲一擲」(内篇大宗師注釈)等に依るのであって、元隣の『莊子口義』熟読の結果は作中の寓話に顕著で、③親不孝者に意見しても肯じない、④親族の一人の諫めの話に息子は改心するという構成の寓話は、『莊子口義』(『莊子』内篇人間世の顔闔と遽伯玉との問答の注釈)所載の、②遊びに溺れる親不孝者に親族は怒るが、改まらない、⑤その一人の話に息子は改心するという挿話の構成に学んでいる。超俗への憧憬を語り、「大きな夢」を説く元隣の目に『莊子口義』中の「東坡言因読莊子而悟作文之法」が映じていたはずである。

2 「『小さかつき』論」は、2作目のこの隨筆が元隣の老莊的視座の深化の所産であることを論ずる。書名を『莊子』の卮言に借り、51段中には老莊的隱士の「風露先生」「不可可」「老莊の玄理をもうかどう」「又是」等の人物が登場し、また『列子』所載の商丘開の行為を評した孔子の言葉を注釈した『列子口義』の「卮言」(『列子』)に依って、放火を防ぐ処方をもとに難を逃れた又六の話の寓意を「此医者ふかく本草を信じ又六念なくこのいしやをたのミつるまことのいたす徳なるべし」と説く。こうした寓話は『莊子口義』『列子口義』に指摘する寓言の受容の所産である。これらの寓話で彼は「書物の上の弁論」と異なる「世の中にすみてのことはり」の柔軟さを説く。その視座は林希逸の「卮言」(『莊子口義』)や「又六」(『列子口義』)の評の受容にあり、そこには元怒が父の作品を「知」(『宝蔵』後序)と評した批評意識をも内在させていた。

第五節「『飛鳥川』の性格」は、需医中山三柳の『飛鳥川』執筆意図を明らかにして、『飛鳥川』の持つ性格を論ずる。執筆意図の第一は序に「性理のかたハしに。のれるたぐひを…吾小童子に。しめさん」と記した「性理」学の啓蒙である。「性理のかたハし」とは語孟とその『集注』『朱子語類』『性理字義』『入学図説』で、全86段中にこれらの論説を祖述した段は19段を数え、『朱子語類』『太極図説解』『性理字義』典拠は太極論や日月・自然現象に関する諸段、『性理字義』に全面的に依拠したのは鬼神についての諸段、需積道三教の記述の段は『入学図説』後集の「三峯先生心気理篇注」に依る。朱子哲学に依るのは自然事象の理を説明して、老仏の理に眩んでいる人々の啓蒙の意図から出ている。その第二は『祇園物語』の『孟子』の表層的解釈への批判で、『孟子集注』

の常権の論理をもって逐一反論する。第三の意図は雅遊に気を養い、顔回のごとき在りようを自分の在りようとしたい思いを『徒然草』に倣い語ることであった。

## 第二章 教義問答体作品の形成とその性格

第一節『大仏物語』論は、この作品の、京の大仏に詣でた「予」が、仁王門のほとりで、行脚の僧と仏神儒の三徳を得た「一貫」との問答を傍聴して記したという叙述形式が先行の教義問答体作品『清水物語』に倣い、問答中に中国善書『明心宝鑑』と禅仮名法語『月菴和尚法話』を受容しての形成であることを究明する。その問答は、侍・町人の貧富、名字の事、流行の霊薬・呪術の事等の世相、儒仏道の事、人のあるべき道の事等に亙る。『明心宝鑑』典拠は上巻の仁の答えを五言詩体で述べた部分で、全248句中、『明心宝鑑』依拠の句数は193句に及び、『明心宝鑑』の頁を繰っての作者の利用を物語る。『月菴和尚法話』典拠は下巻の禅についての答の箇所、作者親昵の仮名法話を禅の啓蒙に用いたと解される。さて、この作品が採った「予」が京大仏の仁王門のほとりで傍聴した問答を物語る叙述形式は、『清水物語』上巻の清水寺で「予」が翁と順礼の問答を傍聴して物語る叙述形式の踏襲であって、「予」が詣でた寺院で問答を傍聴すること、問答者の年齢表現が『礼記』・『論語』に依る修辞法であること、「おかしき問答」(『清水物語』)「おもしろく義理を付て問答」(『大仏物語』)と「予」の評価が示されていること、また、両者の問答が当世の世相や儒仏の事であり、巡礼と行脚僧が世相の情報収集者として最適の問う人物であるという共通性が立証する。

第二節『女仁義物語』の性格は、儒教の徳目を宮仕の女房3人の問答で記して、儒仏の融和を基調とする儒教啓蒙書と評される『女仁義物語』が儒教の徳目議論とその例証話を松永昌三の儒教仮名抄『彝倫抄』依拠の事実を指摘してその性格を解明する。『彝倫抄』との対照から、この作品に採用した項目は『彝倫抄』の日用倫理の五常五倫の項目に限られ、朱子哲学を解説した形而上学的色彩の濃い項目は避けている。受容項目における儒仏融合的記述もまた『彝倫抄』に依拠した結果であって、昌三が五常五倫を仏教に関連づけたのは蒙昧の書生に対しての儒教啓蒙の方便と、キリスト教を排斥して「儒風を発揮せしめ」(『彝倫抄』跋文)んためであった。ゆえに、右の意図に基づく『彝倫抄』の記述を受容した『女仁義物語』の五常を五戒に結び付ける談義は、作者が『彝倫抄』の意図を理解しての受容であり、それは女童に「此ものがたりをつたへたく候ひて、われらうけたまはりたるとをりを申て候ぞや」との文脈に置いてみれば明瞭である。作者は女童のために『彝倫抄』の日用倫理の記述に絞って採り入れ、漢語を俗語に置き換え、また、注釈する方法を採って、『彝倫抄』を庶民に受け容れやすい物語として提供した。

第三節『何物語』の性格は『何物語』の典拠の考証に基づいての性格の考察である。この作品は、上巻が二章から成り、前章が「四書とハ」等の主に『翁問答』に依る21項目の儒教語彙の解説、後章が「孔子」等18人の聖賢の簡略に事蹟の記事、中巻は『翁問答』を受容しての「農夫」と「我」の儒仏問答、下巻は「数量」等の『壺囊鈔』等からの84項目の抜書きの簡便な事典的性格の記事という構成である。留意すべきは、作者の藤樹思想の受容には主体性が認められる点で、例えば『翁問答』で藤樹が仏教の詐術性の批判の論拠にした「無実の作事」を受容して仏教の詐術性を指弾しているが、藤樹の批判が末流の仏教に向けられているのに対して、『何物語』は『大学章句』序の仏教批判を論拠に「仏法を異端虚無のおしへなりとて賢人そしり給ふ事をするなり」と論じて



槌』利用は彼らの作品を介して羅山の意図通りに儒教啓蒙の言説を俗に向けて増幅したことになる。

#### 第四章 説話集『三国物語』の形成

1 「『三国物語』の方法」は、編者が『三国物語』138話の説話を我朝→唐→天竺の順に反復する配列方法は『太平記』『北野通夜物語』の方法に触発され、併せて同主題の説話の並列の方法を採ったこと、庶民教化の目的に沿って出典の漢語を平俗な語に言い換える配慮がされていることを明らかにした。編者は宗門者と推測されるが、巻頭に妻の節義と嫉妬・孝と不孝等の儒的主題の説話を配して、近世の思潮に応じた姿勢を示している。

2 「『三国物語』出典考」では、この説話集の全138話中、中世・近世の諸作品、漢籍・仏書を出典とする128話の出典を明らかにした。

#### 第五章 『色道大鏡』の美学

寛永期に富裕町人の家を継いだ藤本箕山は、彼に業を破らせ、京立退きを余儀なくさせた好色遊興の世界に、「道を見る事十有八年」の体験を普遍化した「色道」という生の道を求めた。その結実が『色道大鏡』である。箕山は遊女が持つべき基本的=理想的心性は「あだし心」だと言う。これは一人への真実=浮気という背理的両義的在り方である。この形成は〈遊〉郭が世間の中に好色遊興の場としてありながら、悪所の〈郭〉として隔離されてあるという背理的両義性に基つき、そこで遊びの恍惚を購うために金銀を無限消費しながら、その威力を否定するという背理的両義性に基づく。ゆえに、〈郭〉に金の力で束縛された勤めの身の遊女は、〈遊〉女としてこの束縛を意識させてはならぬ遊びの自由の中に位置づけられ、自らをその中に解放たなければならない。これが「世の中は…になをもかをもしらずがほにて、ただのったりとして、そのわざをつとめたるころばせは…上らふのほんい」（『もえくる』）の理念化を生み、遊女のその「ふり」「わざ」が生得と感得させる時に、箕山は「傾城わが物になりて、少もおくれたる所なし」と賞賛する。箕山の言う傾城は遊女の理念像の謂である。その理想態に「大やう」「はり」「いき」「利発利根」等を彼は挙げる。「大やう」は「気の大ごころ成」発現。「はり」は傾城の威厳品格。「いき」は「心いきのよしあし」の心性。「利発利根」は「客の気をはかる」才覚。だが、「大やう」は「まだるき事」の属性を持ち、「気味のよき」ところの無さにおいて「利発利根」や「いき」と対立し、「はり」は「ふる」を発現することで「あだし心」と背反する。この対立背反を一体化し得てこそ理想者であり、その中核的理念が「しやれたる」こと、つまり、遊女として選り出した性質を磨き、客との遊興を通じて「朽木などの、雨露にさらされてしやれたる兒に」に仕上げた最上の美質である。だが、理想者の形成は遊客によって左右される。箕山は傾城に対する遊客の理念を「粹」に求め、法華經28品に擬した粹への28階梯を設け、究極階梯を円で表象した。粹への階梯に仏道開悟の階梯を導入するのは、色道に世間道理を否定的に超脱する生の理念を求めるからである。世間道理に反定立するこの美学は、好色遊興を邪遊、遊郭を悪所として制する政治思想とも反定立であり、この美学を構築した意識は紹益や光悦等の上層町衆に通低していた。

## 第二篇 仮名草子の浮世草子への受容

### 第一章 仮名草子と『本朝知恵鑑』

奇異神変の知恵を顕現した日本の人物の逸話を『江談抄』『今昔物語集』『歌行詩諺解』『信長記』『太閤記』等を原拠にして物語る団水の『本朝知恵鑑』は仮名草子の『知恵鑑』『飛鳥川』にも依拠した。団水がこの二作品に依拠した理由は、まず『知恵鑑』について検証すると、書名を『知恵鑑』に借りる他に、『知恵鑑』の談理の叙述と理の例証である中国故事・史実を採ることにあった。また『飛鳥川』依拠は16話だが、その集中的な利用は巻二に見られ、同巻の一段は『飛鳥川』下巻の8段に、同巻の6段は『飛鳥川』中巻の27段・29段と下巻の1段・3段・4段・5段に各々依拠し、中国怪異談を潤色して使用することと、怪異の理を説き明かす叙述を採ることであった。この二作品に求めたのは主に奇異怪異の理を説明する叙述であったのである。

### 第二章 仮名草子と『当世知恵鑑』

都の錦が『当世知恵鑑』の話材を時事的話柄や『多満寸太礼』等に得たことは指摘がある。だが、序に「橋軒人が知恵鑑に效ふて」とあるように、巻之三の三の親不孝の二話は『知恵鑑』に取材して当世親不孝話に仕立てて、書名を借りただけではなかった。作者の取材した仮名草子は他に『鑑草』『為人鈔』があり、孝不孝を扱った巻之三と嫉妬の妻を扱った巻之四で『鑑草』原拠の話当世善悪応報談に仕立て、巻之二の佞人を討った武士の話と巻之六の隠者の説く学問論は『為人鈔』に依拠し、さらに、この二作品の訓戒的な叙述を他の話の縁取りに用いた。「知恵鑑に效ふて」とは善悪応報話を教訓の鑑とするとの意図の謂である。また、指摘されている他にも『多満寸太礼』原拠の話がある。巻之六の二の主人公が亡霊と契の話は『剪燈神話』『牡丹燈記』の翻案『多満寸太礼』巻之六の二が原拠と指摘があるが、主人公が春の嵯峨野逍遥の祈りに美貌の女性と出合い契る前半は『多満寸太礼』巻之一の三の前半の文章を借りて優艶に描出し、後半の怪異性を際立たせる方法を探り、原話や『多満寸太礼』と相違する結末を採った。これは「牡丹燈記」のもう一つの翻案である。巻之一も『多満寸太礼』巻之三の四が原拠である。二千風が日光山神殿の拝殿に奉ずる願文が原拠の何某が「富貴発跡司」の額を掲げる社の拝殿に捧げた詞に基づき（1の1）、善報悪報の四話も原拠所載の四話に依り（1の2）、二千風の祈願を聞き届ける神の言葉も原拠の何某の祈願を叶える社の符君の言葉に依った（1の3）。この巻には都の錦の祈願が秘められている。二千風が本姓源氏である都の錦の仮託人物であることから推測すると、二千風の日光山参詣には東照大権現の系譜に連なる源氏末裔の自らの福祿を東照大権現へ祈願するという願望を潜ませたと見られるからである。

## 結び

1「仮名草子の寓意性について」は、第一篇第四章の2で論じた寓意性が仮名草子の随筆作品の特徴的方法であることを論ずる。まず、当の作者が自身の作品をいかなる先行作品に繋ぐと意識していたかだが、『可笑記』の作者は『徒然草』の叙述形式を意識していたし、後続の作者も『可笑記』に『徒然草』受容を見出し、自らの作品に『徒然草』を受容して、その系譜に属することを認識していた。その『徒然草』が近世に入って教訓の書として広く読者を得たことはその注釈書や家訓の記述が如実に物語っており、彼ら作者も『徒然草』に教訓的寓意を読む読み方をして当然で

あった。『可笑記』の作者は『徒然草』第109段「高名の木のぼり」の挿話を《富貴の心得を問う者を断崖の松の木にぶら下がらせ、地面近くへ下りてくると、用心して下りよ、過ちは心安い所で起こす。金銭もその心得だ」との挿話に改変して処世訓を寓した。『悔草』『為愚痴物語』等の作者は『可笑記』のこの方法に倣い、また談理の寓話を『伊曾保物語』に見出した。元隣は『莊子』の寓言に学んだ寓話を『他我身の上』『小さかづき』に綴った。『為人鈔』の作者は跋文に「誠以嘉言述其理以善行喻其事也」と述べてこの方法を明確に認識していたのである。

2 「〈場の物語〉としての教義問答体作品」は第二篇第四章で論及した〈場の物語〉性が教義問答体作品に共有の性格であることを論ずる。〈場の物語〉論は森正人氏の提示であるのは前述した。『清水物語』以後の教義問答体作品が冒頭に〈物語の場〉を有し、その〈物語の場〉に身を置く傍聴者によって物語本文が統括されていることにおいて、これらの作品を〈場の物語〉概念に包摂し得るからである。その題材は儒仏・世相の論議等々入れ替えし得る範列（パラダイム）的關係にあり、選択した題材とそれを叙述する形式とは相違規定的関係にはない。『清水物語』が当世の関心事を学問論、為政者論、友人論等と題材化し、以後の作品はそれを踏襲しただけである。さらに、物語構成を採る問答は、『雛物語』序の「<sup>ものがたり</sup>語とハ出所正しき事をいふなるへし」の概念に従えば、事柄の正統性を問答体で物語ることである。『清水物語』は問答の「ことはりいとありがたくおぼえて」と記し、『女仁義物語』も「有がたき御しめしかな。…いかさま、いにしへの。せいじんのけしんなるへし」と言説の由緒正しさを主張するのはその例証となる。作者が〈物語の場〉の本文化を放棄した時、それは単純な問答書へと変質することになる。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、仮名草子の随筆作品並びに教義問答体作品を中心にその文芸としての形成過程の問題を主として典拠論の見地から解明したものである。

本論文は、大きくは第一篇「仮名草子の形成とその性格」並びに第二篇「仮名草子の浮世草子への受容」の二つの部分から成るが、論者の本論文執筆の意図が頭書に記した点にある以上、本論文の意義は第一篇に存するといって決して過言ではあるまい。第一篇第一章第一節「板本『目覚し草』の典拠の問題」は、板本『目覚し草』成立に際しての典拠の扱い方を検討し、その文芸作品としての性格を明らかにしたもの。板本『目覚し草』が『宝物集』『沙石集』等の中世仏教説話集に直接依拠しつつ『徒然草』の独自の影響下に再構成された作品であるのを指摘したのは卓身である。第二節の1「『可笑記』と中世文芸」、2「『可笑記』と『無名冊子』」、3「『可笑記』と『清水物語』」の三つは、関連する論である。『可笑記』の典拠として中世の仏教説話集『沙石集』や『十訓抄』のほか仮名草子の先行作品『無名冊子』や『清水物語』なども利用されているのを実証するとともに、それらの典拠が作者のいかなる創意意図のもとに利用されたのかを検討し『可笑記』の文芸作品としての特性を明らかにしている。この際、作者如儡子が徳川幕藩体制から除外された悲惨な平民生活の体験者である点に着目して本書の創意意図を解明した点には多くの新見が認められ高く評価される。第三節「『悔草』の創意」は、同書を執筆する作者の意識を典拠論の観点から解明したものの。この作品にも多くの典拠が確認されるが、前節で検討を加えた『可笑記』の説く男の生き方



ないし侍道を反転させたところに『梅草』の執筆の意図や方法を発見した点は本書の性格規定の上からまことに興味深く注目されよう。第四節1「『他我身の上』論」と2「『小さかづき』論」は、山岡元隣の下二篇の随筆に関する論で、元隣の随筆作品の形成方法と創作意識とを解明したものの。1の論では、『他我身の上』が『徒然草』の強い影響下に成った作品であることから『徒然草』の注釈書の一つである儒学者林羅山著『徒然草野槌』との関係を検討し、元隣が『野槌』に対しては、むしろ批判的な立場にあったのを明らかにする。論者はその理由を元隣が老荘思想に深く親炙していたからであるとして、その受容の実態を実証的に究明し、元隣の創作意識の底に超俗への憧憬の念を認めているのは注目すべき見解である。また、2の論は、『小さかづき』が元隣のそのような思想的傾向の一層の深まりを示す作品であることを典拠論の観点から詳細に実証してみせた論である。老荘の見地からの元隣の俗世間に対する批判的精神は、委曲を尽くした実証的説明に支えられ、十分な説得力を有すると考えられる。第五節「『飛鳥川』の性格」は、儒医中山三柳の著した『飛鳥川』の執筆意図を究明し、作品の特性を明らかにしたものの。論者は、本書が老荘思想や仏教を排し、「性理」の学を啓蒙する意図をもって執筆されたと主張する。ただし、本書が『徒然草』の強い影響下にあり、儒家文人の理想像を雅遊に気を養う顔回的生に置いていると指定しているのはまことに鋭い指摘で注目に値する。

さて、仮名草子には作者の思想を語る方法として問答体形式を採用したいくつかの作品が存在する。第一篇第二章はそのような形式をとる作品についての考察である。第一節「『大仏物語』論」は、『大仏物語』の問答体形式は先行作品『清水物語』の形式を踏襲したもので本作品の創意ではないと確認した上で、問答の内容を究明したものの。『大仏物語』の問答の内容は世相から人の道、儒仏道にまでわたるが、注目すべきは、論者が問答の内容の典拠を和漢の書籍に広く求め、その摂取法を詳細に論じた点であり、きわめて説得力に富む論といえる。第二節「『女仁義物語』の性格」は、『女仁義物語』が儒者松永昌三の啓蒙的仮名抄『彝林抄』に依拠して成ったのを実証的に論じたもの。『女仁義物語』は宮仕女房三名の問答形式により儒教における女性の社会的徳目を啓蒙するいわゆる女訓物であるが、論者は『彝林抄』の特に日常的倫理を子女を対象とする物語として提供したのが本作品であったと主張する。この指摘は本作品に新しい見方を提供するものとして高く評価されよう。第三節「『何物語』の性格」は、本物語の典拠を検証し、その調査結果を踏まえて物語作品としての性格を解明したものである。中江藤樹『翁問答』の本作品に対する影響力の大きさを具体的に検証しながらも、随所に作品独自の儒教思想が展開されている点を指摘したのは卓見であり高く評価される。第四節1「『海上物語』における物語性の在り方」、2「『海上物語』における引用の様相」の二つの論は、補完関係にある論であるといえよう。なぜなら、1は『海上物語』の文芸作品としての創作意識を考察した論であり、2はこの物語の形成にかかわった典拠の問題が中心となる論だからである。二つの論において、論者は、作者恵中が『二人比丘尼』『念仏草紙』のごとき仏法物語をはじめとする。師たる鈴木正三の全著作、語録等、さらには作者自身の作品の叙述を踏まえて『海上物語』を執筆している点を指摘しているが、その理由を正三の禅思想並びに彼自身の念仏禅の形象化の意志に求めているのは大いに注目されてよい見解である。また、1の論で興味深いのは、『海上物語』の物語化の方法が『清水物語』に倣うものであるとし、最近の物語理論を援用して〈物語の場〉に傍聴者として関与する人物により物語本文の統括がはかられる作品を〈場の物語〉と称するとすれば、『清水物語』を踏襲した『海上物語』は〈場の物語〉と定義で

きると指摘している点である。『海上物語』の性格を規定する上からこれは新見解であるといえよう。第一篇第三章「仮名草子における『徒然草野槌』の受容の様相」は、林羅山著の『徒然草』の注釈書『徒然草野槌』が仮名草子の作者たちにいかに多様な影響を及ぼしたかの実態を実証的に究明した論である。仮名草子の作者たちと羅山との思想的な親疎の関係が精確に見極められており評価される。第一篇第四章「説話集『三国物語』の形成」は、1「『三国物語』の方法」及び2「『三国物語』出典考」の二つの論から成る。2は説話集としての『三国物語』の出典論、1は典拠論を踏まえての創作方法を解明したもの。1と2は相俟って『三国物語』の文芸的な特色を解明したものととして高く評価されよう。第一篇第五章「『色道大鏡』の美学」は、自己体験を「色道」という観念にまで普遍化した藤本箕山の思考過程の美学的意味を詳細に解明した論である。箕山は遊女の理想的心性は基本的に「あだし心」とし、その具体的なあり方を説明するとともに、そのような遊女に対する遊客の理念を「粹」にもとめる。世間の道理に反定立する箕山の美学を当時の上層町衆に通定する思考と捉えたのは注目してよいであろう。

第二篇第一章「仮名草子と『本朝知恵鑑』」、第二章「仮名草子と『当世知恵鑑』」の二つの論は、仮名草子が浮世草子にいかに受容されたかの実態を二つの作品を例として主として典拠論の見地から実証的に考察したものである。ただし、これは非常に大きな問題なので論者の今後の課題の一つとなるはずである。「結び」1「仮名草子の寓意性について」、2「〈場の物語〉としての教義問答体作品」の両論は、第一篇の結論に相当する。論者は、仮名草子の文芸的な特色が寓意性に求められること、さらに教義問答体作品の場合は〈場の物語〉としての特性が認められる点を強調しているといえよう。論者は、国文学研究の分野でも資料的な面においても文芸性の究明という面においても大きな困難のともなう仮名草子研究ひとすじに取り組み、以上に略述したような注目すべき独創的な成果をあげた。ここには多くの新見が提示されており、今後の仮名草子研究に新たな指針を与えることになるのは疑いを入れない。さらに対象を広げ仮名草子の全体像を明確化するという課題は残るが、本論文は仮名草子研究の一つの達成を示すものとして高く評価される。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。